

名古屋男声合唱団 団内誌



Agora

第 34 号



2025. 7. 6

◆ 第 34 号目次 ◆

新たな曲作りを目指して

- ◆ 第3ステージ: 白秋万華鏡 — 白秋の詩による男声合唱アンソロジー —
理解のために<その3>

T1. 高橋昭弘

— 1 —

付記:<その1>はAgora 第32号 2025.1.28、<その2>はAgora 第33号 2025.4.20
に掲載されています。

- ◆ 閑話三題

B1. 安藤嘉章

— 11 —

第3ステージ：白秋万華鏡

白秋の詩による男声合唱アンソロジー

理解のために <その3> 高橋昭弘

3. 再生—童謡詩人白秋

前稿<その2>で、白秋が小笠原生活の中で出会った無垢なる子どもを通して、「子どもの発見」という啓示を受けたことに触れたのですが、その体験が、その後の『赤い鳥』運動への参加、熱烈な童謡の推進者へとどう結実していったのか、そしてまた『赤い鳥』運動とは何だったのか、を見ていきたいと思います。

3-（1）小笠原から麻布へ—北原家の「窮乏」

三崎から戻った両親、鐵雄、妹の家子は麻布坂下町（現在の麻布十番）の借家に入る。麻布は坂が多いところ。坂の上にはお屋敷が並ぶが坂の下には庶民の小さな家が並ぶ。坂下町はその名前のとおり、坂下の庶民の町である。

鐵雄は、三崎に残った兄白秋への手紙のなかで、母と妹が質に入れた着物を金がないために質流れにしてしまった苦しい生活を記したが、当時、鐵雄は金尾文淵堂の給料をすべて父親に渡し、父親から毎日の昼食代や電車賃をもらっていた。明治の家父長制度が厳然と生きている。

そんな暗い状態の北原家へ、小笠原から戻った白秋夫妻が入ることになった。事態が悪化してゆくのは目に見えている。白秋は後年『雀の生活』の中で、「麻布にいました頃は随分と私達は惨めでした」と回想している。

その冬の貧しさは言葉に尽くせません。私達親子は眼を見合わせ、たゞ心と心ばかりで縫りあつてゐました。朝の御飯をいたゞく時も、箸は動かし乍ら、誰も黙つてよう話せません。父はむつゝりと怒つたやうにしてゐます。母はいつまでも手をつけません、さうしてはあと云ふ深い溜息をします。さう云ふ時位、私は肉親の母の心に深く喰ひ入つてゆく自分の心に、自分と驚いた事はありません。全く私は背骨がビシビシ折られてゆく思いがしました。貧故のひがみや、皮肉や、いがみ合ひや、さうした間はまだいゝのです。皆が黙つて了ふともうおしまひです。

もちろん、長男である白秋はこの状況に手をこまねいていた訳ではない。小笠原から戻った大正二年には、自らの詩歌結社、巡禮詩社を創立し、雑誌「地

上巡禮」を創刊、また前述したように小笠原からの帰京に際し世話になった金尾種次郎の金尾文淵堂から短唱集『真珠抄』と詩集『白金之独楽』を出版している。

さらに翌大正三年には、金尾文淵堂を辞めた弟鐵雄とともに、阿蘭陀書房を創立、文芸誌「ARS」を創刊する。

実に精力的に仕事をしている。しかし、詩集や歌集、文芸誌がさほど売れるとは思えない。現在と同じである。まして大資本の出版社ではなく弟と二人の、家内工業的な弱小出版社のもの。どんなに質をよくしても、思うようには売れない。

明治の実利優先の時代に生まれ育ちながら、実社会では無用の芸術に夢を追いつけた白秋は、心底の芸術詩人といっている。その点では、同じように明治の実利主義に背を向けて、孤高の芸術の道を歩いた永井荷風と重なり合う。彼らは共に、富国強兵、殖産興業、「詩を作るより田を作れ」の時代にあつて、孤立を承知で「芸術」の理想に殉じようとした。ただ、荷風が明治エリートの父親の恒産を受継ぐことで高等遊民、利子生活者（ランティエ）の余裕ある文人生活を生きることが出来たのに対し、白秋は、柳川の裕福な造り酒屋の長男として生まれながら、若い時に実家の没落にあい、文筆一本、それも部数が見込まれる小説ではなく、少ない読者を相手にする詩歌によって生きることになった。

「詩だけで生活してゆく」。同世代の高村光太郎は彫刻家の父を持ち、斎藤茂吉は歌人である以前に医者として生活の安定が保障されていたことを思えば、筆一本で生きる白秋の経済生活は、悪戦苦闘の連続だったといえる。近代の詩歌人で、文筆のみで生き続けたのは白秋の他は、そうはいないのではあるまいか。

3- (2) 俊子との離別

ついに大正三年、白秋は「窮乏」の中、俊子と離別する。俊子にもわがままなところがあったろう。夫の窮乏生活についてゆけない弱さもあったろう。しかし、三崎から麻布へと続く、白秋の両親との息苦しいほどの同居生活に俊子がついに耐えられなくなったことを誰が批判しえよう。

とくに麻布時代の、白秋自身が書いているような「皆が黙つて了ふ」ような暗い生活に嫁である俊子が耐えられなかったとしても無理はない。

白秋にとっても、俊子は姦通罪で世間に指弾されても添いとげた、いわば恋人房である。その俊子と別れることは、決して簡単なことではなかったろう。

だいいち、別れてしまうのなら、下獄、三崎と小笠原そして麻布での苦勞の多かった俊子との生活はなんだったのかという痛恨の思いがあったろう。

しかし、「皆が黙って了ふ」絶望的な環境のなかでは、俊子は北原家を出て行かざるを得ないし、白秋もそれを止めることは出来なかった。あとには、それぞれに心の傷だけが残った。

そんな時に、白秋の前に、もう一人の女性が現れる。平塚らいてうを通じて知り合った江口章子^{あやこ}という、自ら歌を詠む女性である。白秋にとっては、彼女が二番目の妻となり、大正五年（1916）から大正九年（1920）まで約四年間、苦樂を共にする。

相変わらず、白秋の生活は「窮乏」を極めたが、江口章子との結婚でひとつ大きく変わったことがある。白秋は、貧乏生活をみじめなことにとらえずに、積極的に貧しさを楽しむようになったのである。芸術の理想に生きる者は貧しさを受け入れなければならないと覚悟して。

3-（3）葛飾暮らし－田園に幸あり

大正五年（1916）、松下俊子との波乱の多い関係を絶った白秋は、江口章子を二度目の妻として迎え、東京府南葛飾郡小岩村三谷（現在東京都江戸川区北小岩八丁目）の青田のなかの一軒家に住居をかまえる。

借りた家は、江戸川べりの草を刈り集めて軍馬の飼料葉などを作る乾草商の家の離れ。八畳と六畳の二間しかない小さな家だが、八畳には床の間と違い棚が、六畳には冬の用意に炉が切っているのが好ましい。真間の部屋と違って今度は台所もあるから、妻の章子は「これで私も落つきます」と喜ぶ。まわりは田園。庭には、榎の木、河柳、泰山木などの木が植えられている。「芭蕉庵と云った風」。「千駄木の先生」（森鷗外）そっくりの乾草商ものんきで、いたって気がいい。

そして白秋は、紫の煙が立ちのぼる畑のなかの小さなわが家を「詩淵草舎」と名づけ、翌大正六年（1917）の六月に東京に戻るまでの一年間、そこで貧しくも静かな、精神的には落ち着いた田園生活を続けることになる。

田園のなかのわずかな二間の家だが、白秋は「葛飾から伊太利へ」の中で「いい住居だ。私の思った通りだ」と喜びを隠さない。

朝起きると井戸端で紫のあやめを見ながら顔を洗う。「噴井^{ふきゐ}べのあやめの下のこぼれ水雀飲み居りあふるる水を」の静謐な世界である。

私はこの地面にびつたり合った生活がしたい。百姓達に交じつて、生まれた儘な明けつ放しの素朴な、みづみづしい、真実の人間らしい生活がして見たい。私はこれから愈素つ裸だ。

たとえ経済的には苦しくとも「芸術」のためには、その労苦を嫌わない。当時、白秋ほどの名前があれば、思い立った時に詩歌や散文を書けば、いくらでも載せてくれる雑誌や新聞はあった筈だが、白秋はあえてそれをせず、のちに『雀の卵』に収められる歌を作り、推敲することに明け暮れる。この歌集は完成までに実に八年の歳月を要している。

大正六年の一月から六月までは、『雀の卵』の中の歌の推敲や新作と、一緒に葛飾の歌を作る事に夢中にされた。冬枯のさびしさに雀の羽音ばかり聴いて、食ふものも着るものも殆ど無い貧しい中に、私は坐り通しであった。私の机の周囲は歌の反古で山をなした。何度も何度も浄書し換えた。
(『雀の卵』大序)

「芸術」を信じ得た白秋には、歌のための貧は決して苦にならなかったろう。むしろ、貧するほど、「芸術」への思いが高まってゆく。「閑寂三昧」の暮らしに喜びを見いだしてゆく。

3- (4) 村童たちの無垢

夏浅み朝草刈りの童らが素足にからむ犬胡麻の花（「向う土堤」）
カンナの花黄なる洋燈ランプの如くなり子供出で来よ背戸でこの月夜に（「背戸」）
子供らが息のこもごも青草にふかくこもらふ昼ふけにけり（「かくれんぼ」）

『雀の卵』には村の子供たちを詠んだ歌が多い。「草刈り」の仕事を手伝っている子供たち。青草の中でかくれんぼをしている子供たち。村童たちの明るさ、健やかさがうかがえる。「月夜」に子供たちよ遊びに来いと呼びかけてもいる。

村童がどんなに無邪気で可愛かったか。白秋は散文でも書いている。「葛飾小品」に収められた「蛭」「馬」「蓮の花」。いずれも大正五年に書かれた小文だが、村の子供たちの無垢な可愛さが描かれていて素晴らしい。まだ「子供たちの無垢」が素直に信じられた幸福な時代である。

子供たちは一人一人に私の前にその両掌りょうてを開いた。泥まみれな全く汚い手だ。然し活々とした掌、愛と力とに満ち、紅みがかつて指の尖さきまで膨れ

かへつてゐるそれらの掌、そこには抑へきれぬ生^{いのち}が今にもはぢきれさうに躍^{はね}つてゐる。快い活潑な発育！

『蓮の花』では、ふだん白秋夫妻が優しくしている貧しい家の男の子が、御礼にと、家の溜め池に咲いた白い蓮の花を持ってくる。それに感動した白秋は「何といふ尊い贈り物だ」「子供は生まれながらの仏^{ほとけ}である」と書く。

白秋の「童心」「無垢」への思いは、葛飾ののどかな田園生活で実際に村の子供たちと接したことからはぐくまれていったものだと思われる。やがて『赤い鳥』誌に、数々の童謡の作詞をしてゆく白秋の童心讃歌は田園から始まっている。

3- (5) 童謡の誕生

葛飾での田園生活を終え、一時東京に戻ったあと、北原白秋は大正七年（1918）三月に、神奈川県小田原町（現在、小田原市）のお花畑という海岸寄りの静かな住宅地に家を借りて移った。妻章子が胸を患っており、その療養のため気候温暖な土地を選んだという。

十月には、東海道線の北の山側にある伝肇寺^{でんじょうじ}という境内に移り、ここでようやく貧窮生活から脱し、翌大正八年には、竹林のなかに「木菟^{みみずく}の家」と呼ぶ萱屋根に藁壁の小さな家を建てた。さらに大正九年には赤瓦の三階建て洋館を新築し、以後大正十五年（1926）まで小田原での生活が続く。

此の小田原に来てから、私も愈々のびのびと安らかになつて、本当の軽い自分の呼吸をつけるやうになりました。それも雀のお蔭です。

（『雀の生活』）

そして、この小田原時代、白秋は詩とも歌とも違う新しい表現形式を見つけ出す。童謡である。

大正7年（1918年）鈴木三重吉の主宰による児童文学雑誌『赤い鳥』が創刊されます。

この創刊号巻頭に北原白秋の詩「栗鼠、栗鼠、小栗鼠」が掲載されており、これが大正期童謡の第1作となります。この時は詩のみの掲載でしたが、翌年の5月号から楽譜も掲載され、昭和8年廃刊までに全148曲が創作されました。

『赤い鳥』創刊にあたって白秋は、新しい子供の歌の創造宣言をしますが、その中で明治期唱歌に対して激烈な批判をします。

「極端に云へば、現在の国定教科書、若しくは文部省認定の唱歌は曲の上は知らず、その歌詞の価値批判の上から見て、殆ど全廃すべきである。一

に美無く生命なく童心なき、かくの如き歌詞に現はれたる児童教育に於ける精神態度方法の誤謬、二にはその歌詞の不純蕪雜拙劣である」

「私は確信する。今日、日本の小学唱歌はその根本に於て一大革新を要する。でなければ日本の児童はその詩若くはその音楽の方面に於て真に救われる道がないのだ」（「小学唱歌々詞批判」）

大正期「童謡」の大きな特徴は、明治期「唱歌」を全面否定するところから出発しているという点にあります。

3-（6）明治期唱歌の特徴とは

それでは、明治期唱歌とはどのようなものだったのか、振り返っておきましょう。まず「唱歌」の特徴を、その根底にある「音楽教育観」から見ておきたいと思います。

その教育観は、一言で言えば「徳育主義的音楽教育観」と言われるものです。我が国最初の音楽教科書『小学唱歌集・初編』（音楽取調掛編 明治15年刊行）の巻頭の「緒言」には、音楽教科の目的として「徳性の涵養をもって旨とすべし」との趣意が揚げられていました。

つまりこの音楽教育観は、「芸術としての音楽」の教育ではなく、「徳性の涵養」を目的としていました。

こうした教育観のもとに作られた明治期唱歌は、国家からの要請を子どもたちに求める、或いは大人の側の価値観を子どもたちに押しつける、という性格が濃厚であったといえます。

こうした明治期唱歌に対して、同時代の著名な詩人である萩原朔太郎などは、「蛍の光」を例に上げて次のように書いています。

「（蛍の光を）自分達は卒業の歌として教えられたが窮屈で歌う気がしなかった。後になって映画などで西洋人がその歌を酒を酌み交わしながら陽気に歌っている様子を見て羨ましく思った。みな学校を出れば唱歌など歌わないで、当時の流行り歌ばかり口ずさんでいた」

出発当初から既に、唱歌については「唱歌校門を出でず」との風評が定着していました。

明治5年、政府は公教育を開始すべく「学制」を制定します。その際主要な教科である「国語」とか「算数」などについては何とかあったのですが、「音楽」については適切な教材もなく、教師となる人材もいませんでした。やむなく学制

出発当初「音楽」については「当分之を欠く」とされます。

そして、文部省の下に「音楽取調掛」を設置し、音楽教科の教材作りのために、専門家集団を集め新たな曲作りをさせます。ここで作られた歌を編纂して作られたのが、我が国最初の音楽教科書である「小学唱歌集・初編」です。「蛍の光」は、これに収められています。

「蛍の光」の旋律はスコットランド民謡から取られていますが、歌詞の方は新作されました。専門家集団（詩人・文学者たち）が試作を作り文部省に送り、その案を文部官僚がチェックして差し戻し、その何度かの往復の末にこの歌詞が策定されました。

この「蛍の光」を具体的な例として、明治期唱歌の特徴を見てみましょう。

- | | |
|--|--|
| 1. ほたるのひかり まどの雪 ふみよむ月日 かさねつつ いつしかとしも すぎのとを あけてぞ今朝は わかれゆく | 3. 筑紫のきわみ みちのおく うみやまとおく へだつとも そのまごころは へだてなく ひとつにつくせ くにのため |
| 2. とまるもゆくも かぎりとして かたみにおもう ちよろずの こころのはしを ひとことに さきくとばかり うたふなり | 4. ちしまのおくも おきなわも やしまのうちの まもりなり いたらむ国に いさをしく つとめよわがせ つつがなく |

2番までは卒業式などで歌われた思い出のある方が多いと思いますが、3、4番は現在では一般では全く忘れられています。（戦後、「不都合」として削除され歌われなくなったものです）。しかし、明治期の唱歌の特徴は4番までを歌って初めて全体像を知ることができます。

この歌は学業を終了し卒業してゆく学生たちに歌わせるものとして作られており、前半分（1、2番）では「蛍雪の功」の故事を引きながら、学業を修め世に出て行く学徒の心情を歌います。

これが第一の明治期唱歌の内容上の特徴で、一言でいえば「立身出世」思想と要約することが出来ます。どんな個人も努力して学修すれば「身を立て、世に出でる事が出来る」という欧米の進歩的な個人主義思想の影響による明治期思想の積極面ということが出来ます。

この前半に対して、後半分ではその内容は一転し、卒業していく学徒に対する国家からの期待が歌われます。3番では「ひとつにつくせ くにのため」と国の

ために尽くすことが要請され、4番では更に一步進んで領土問題を取り上げます。

当時、北方領土の範囲については一応定まっていたのですが、沖縄に関しては、丁度その頃、清国との通商条約を有利に結ぶために、「沖縄の割譲」を含む政府案による交渉が微妙な状況にありました。当初取調掛案では「千島の奥も沖縄も 八島のそとの守りなり」とされていた案を、文部省側が穏やかでないとして「八島のうちの」と修正されます。当時の政府方針からすれば沖縄を自国の「うち」とするか「そと」とするかは大問題であったのです。

その上で、卒業生に対して、「いたらむ国に いさをしく つとめよわがせ つつがなく」、と国家への忠誠の期待を歌いあげます。

この後半分が二つ目の明治期唱歌の特徴です。一言に要約すれば「国防思想」であり、明治期政府の国家的スローガンの一つである「富国強兵」策の反映といえます。

「蛍の光」が端的に示すように、明治期唱歌の特徴は「立身出世」と「富国強兵＝国防思想」という二面性にあり、これは当時の思想的リーダーである福沢諭吉のいうところの「一身独立して一国独立す」の主張とぴたり符号します。

もう一つみなさんがよくご存じの「我は海の子」を例にとって見てみましょう。。現在は2番までしか歌われませんが、明治期教科書では7番までありました。海辺に生まれた少年はたくましい青年へと成長し、最後の7番では、

いで大船を乗り出して、我は拾わん海の富

いで軍艦に乗り組み、我は護らん海の国

と歌わせます。あからさまにリアルな政治的歌謡であったといえましょう。

明治期唱歌の典型的事例である「蛍の光」「我は海の子」は、国家の側が期待する子ども像を一方的に押しつけるものであり、こうした特徴が明治期唱歌に通底する特徴であったといえます。

こうした事例を背景とすれば、萩原朔太郎の感想も白秋の激烈な批判も、よく理解できると思います。

3- (6)『赤い鳥』の創刊

それでは、大正期童謡の舞台となった『赤い鳥』とはどんな雑誌だったのか、改めて見ておきましょう。

主宰者の鈴木三重吉もまた、児童文学雑誌『赤い鳥』を創刊するにあたって、次のように述べています。

「現在世間に流行している子供の読物の最も多くは、その俗悪な表紙が多面的に象徴している如く、種々の意味に於て、いかにも下劣極まるものであ

る。こんなものが子供の真純を侵害しつつあるということは、単に思考するだけでも怖ろしい」

「子供の純性を保全開発するために、現代第一流の芸術家の真摯なる努力を集め」ようと全文壇に呼びかけた。

鈴木三重吉は、子供を大人によって教育されてゆく過程にあるものとみなさず、子供は独立した存在であり、大人の世界とは別に、子供時代という特別な時代があるのだと考えた。

明治国家の富国強兵、殖産興業のなかで、大人の予備軍として学校教育のなかで管理されていた子供を、自由に解き放つ。立身出世の制度から芸術や美の世界へと、子供を解き放つ。

子供は決して大人の従属物ではない。子供時代は、大人への過渡期ではなく、それ自体独立した輝かしいものである。こうした子ども観は、新たな「子供の発見」といえます。

この呼びかけは文壇のならず、音楽家、美術家にも及んでいました。『赤い鳥』の表紙画、挿絵にも当時の一級の画家たちが起用され、その斬新なデザイン性は高く評価されています。

その雑誌名から「赤い鳥運動」と呼ばれたように、雑誌『赤い鳥』を軸として結集した芸術家たちにより展開されたこの運動は、文学、詩、音楽、美術等を含む総合的な「芸術運動」であったといえます。さらにその支え手としての読者即ち市民、普及に力を果たした教師たちを中心とする学校教育の現場の存在もまた見落とすべきではないでしょう。

「赤い鳥」の創刊号に発表された「栗鼠、栗鼠、子栗鼠」をはじめ、「雨」（大正7年）「お祭り」（同）「赤い鳥小鳥」（同）「あわて床屋」（大正8年）「揺籃のうた」（大正10年）「砂山」（大正11年）「からたちの花」（大正13年）「ペチカ」（大正14年）などなどいまも親しまれている作品がたくさんある。

手許の岩波文庫『日本童謡集』（与田準一編、初版1,957年）には、白秋の童謡が40編も選ばれている。西条八十の30編、野口雨情の24編よりも多い。

白秋自身『からたちの花』序文（大正15年）の中で「私は既に千に近い童謡を作った」と書いている。白秋が童謡を作り始めるのは、大正7年（1918）に「赤い鳥」に発表するようになってからだから、8年ほどのあいだに千近い数の童謡を作ったことになる。

3-（7）章子との破綻と三度目の結婚

さて、章子との結婚については前述しましたが、その後の白秋の私生活につい

て、簡単にふれておきましょう。

大正八年（1919）に最初の童謡集『とんぼの眼玉』（アルス刊）を出した翌年の大正九年には、小田原の山裾、伝肇寺^{じょう}の寺内に、『とんぼの眼玉』の挿絵にあったような赤瓦の三階建ての洋館を建てることになる。

ところが地鎮祭の時に事件が起る。妻の章子が雑誌「大観」の池田林儀という編集者と駆け落ちしてしまったのである。一年後、白秋はその間の事情をつぎのようにぼかして書いている。（「兎の電報」はしがき、大正十年）。

家を建てるに当たって伝肇寺の住職ともめてしまひ、「何も彼もいやになって、そのまま自分の家からぼつと出て了ひました」。そのあと和解。「（家に）帰ることになりましたが、今度は妻の方で、あなたのやうに自分の家から逃げ出すやうな方はあまり阿呆らし過ぎる、私はもつと人間らしい世界に出て行き度いと云って、遠いお国へ行つて了ひました。それで私はたうとう一人ぼつちになりました」。

しかし、幸いに「一人ぼつち」は長く続くことはなかった。翌大正十年には、小田原の美術評論家、河野桐谷夫妻の紹介で佐藤キクという家庭的な女性を知り、新築なった洋館で結婚式を挙げた。以後、生涯続く穏やかな家庭生活に入った。翌大正十一年には長男隆太郎が生まれ、父としての白秋はいよいよ童謡に力を入れてゆく。

北原隆太郎の『父・白秋と私』（短歌新聞社、2006年）によれば、「父白秋は、生まれたての嬰兒の私に、自作の童謡を独特の節廻しで歌って、あやしてくれた。母の記憶によると、父は『ほうほう螢』、『ゆりかごの歌』などのほかには、創ったばかりの新鮮な童謡を、その都度、口ずさんで聞かせることが多く、母もその新作を悦んだ」。

白秋の童謡詩の特質、彼が童謡詩に込めたものはなんだったのか、等については最終稿＜その4＞で取り上げることとします。

＜続く＞

閑話三題

B1 安藤嘉章

その一

前回の第三ステージの企画は当団ならではの「知」の選曲で決して他団では真似のできない素晴らしい企画だったと思っています。縦系に民謡や伝統音楽を横系に戦後 80 年の日本の作曲家を並べて、どんな合唱曲が創られてきたかを俯瞰しようという発想は「情」でしか歌を捉えない人たちには思いもつかないことではないでしょうか。

戦後の著名な邦人作曲家が日本の伝統音楽をどう合唱曲に編み上げたかを検証し、表現してみせるという素晴らしい試みの機会だったと思っています。

どんなステージが出来上がるかワクワクして身構えていました。

しかし、松下耕(津軽じょんがら節)がカットされ、「刈干切唄」(池辺晋一郎)が仕上がらないという状況に、そんな大風呂敷を広げる前に個々の曲を仕上げることを迫られた感じがして残念の極みとなりました。企画の壮大さに比べ歌う側の姿勢が圧倒的に遅れた感はありません。痛切に反省しました。

今回の演奏会でも白秋という詩人を縦系にこれに絡みつく邦人の作曲家の作曲や編曲が並びます。白秋の全体像を明らかにしていくことが主となるでしょうが私としてはそれぞれの作曲家の音楽を感じたいと思っています。一見シンプルにみえて音色や歌い方をどうこなすかとても難しい曲、和音の変化が目まぐるしく変わりながら平易な言葉を紡いでいく曲など歌いがいい曲が並びます。

ともあれ、「知」だけでは音楽はできません。如何に全体の中で個々の曲を歌い上げられるかが団員に課せられた使命だと思っています。「日本語」の歌い方も今回の課題となってくるでしょう。

その二

小田切清光という詩人をご存知の方がおられると思います。1960 年代、壺井繁治の呼びかけで赤木三郎、門倉詠らと「詩人会議」を立ち上げたメンバーの一人で大学合唱協

会が依頼創作をした「生活漕ぎ歌」(初演は高橋昭弘さんの指揮で男声合同演奏として歌われた)の作詞者です。その後、名大男声が「夜明け太鼓の歌」「飛翔」などの作詞をお願いしているようです。

その小田切さんが名大男声の定演のプロなどに寄せられたメッセージは歯切れのよい元気な躍動感のあるメッセージでした。しかしそんな詩人も最晩年(と言っても今から約20年前の70歳頃)に送っていただいた詩集「冬の青空」を読むと、25編の詩が老境と死への対応に貫かれており、寂莫感の中に達観した姿が浮かび上がるのに驚いたのを覚えています。その様は詩集のタイトルどおり凜と澄み渡る清澄さが貫かれています。私が鈍感なのか詩人の感性が鋭すぎるのか、私には日々の喧騒が絡みついて現在まではそんな心境になれません。

さて、現在「老境」を主題とした創作活動が進んでいますがどんな選詩がされるのでしょうか。先日金沢での音楽祭(ガルガンチュア音楽祭)で実行委員長を務め元気な作曲家の池辺晋一郎さんを見ましたがどんな男声合唱曲が出来上がるのか楽しみです。

その三

林光の「ソング」が選曲から外れたようですが、「ソング」の音楽的素晴らしさは何と言っても1番から最後まで同じメロディを歌い重ねていくうちに音と歌詞の中に自分が没入してしまう不思議な魅力があるということです。声を合わせるもの同士が音楽的連帯感を感じるともいえましょう。その高揚感は他の曲にはないものでした。私の所属してきた名古屋市民コーラスでは1980年と1982年に林光さんの構成と演出で定期演奏会のワン・ステージとして「ソング」を取り上げました。80年には「世界を変えろ・林光の日本語プレヒト歌集」として全7曲、82年には「生きるためのメッセージ 林光ソングアルバム」として全6曲を歌った経験があります。ステージいっぱいに広がって歌うさまは私の信条である合唱団員一人一人は「One of them」ではなくて「Only One」なのだを実感する演奏スタイルでした。バリトンの西島さんはこの林光の「ソングを歌う会」を主宰しておられます。

(2025.06.02 記)